



モナリザが美しいのは、ダビンチが骨や筋肉の仕組みを知っていたから  
～中学校美術科・高等学校芸術科美術研修講座～

人物画をうまく描くには、しっかりと人体の構造を知ることが大切。大学時代、受講者は、医学生でもないのに『解剖学』の授業を受けました。きっと懐かしく郷愁にひたるとともに、自身の不勉強さを悔いたのではないのでしょうか。8月5日、福島大学教授 渡邊晃一氏を講師に、中高美術科研修講座が開かれました。

人体骨格模型や頭蓋骨、そして動物の骨が居並ぶ、理科室かと思まごう美術研修室で、解剖学を切り口に、学校教育における美術教育について深く学ぶことができました。



講義と実習を通して行われた専門的な技能習得の講座の中にも、教育学的な要素が充分に含まれていました。人体や動物を構造的な視点から見ることを幼稚園児に行うことで、園児の絵がみごとに変化しました。指導者の見取りや言葉かけが子どもたちの資質・能力を向上させる事例です。しかしもう一方で、記号的なリングを描いて正解とする、昨今の学校教育ではなく、一つのリングを描くとき、いろんな側面を重ねて描ける子どもを育てなければならないとの講師の言葉でした。まさに美術教育の存在意義であり、これからの子どもたちに求められる資質・能力です。



また、芸術を視覚、聴覚、言語の領域に分けた場合、言語化されていないものが美術と考える人が多い中で、解剖学は言語的要素に入り、すべての領域に広げていく力を持っている。つまり、美術はたくさんの頭を使っていると表現されました。なぜ、小学校図工や中学校美術が必要であるかの回答がここに示されました。

「自然を師とし学ぶこと」それが美術解剖学。実技を交えながら、美術分野だけに留まらず、芸術的、理科的、数学的等、様々な見方・考え方を学ぶことができた1日となりました。